

---

# ミルキー

佐伯 美和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミルキー

### 【Nコード】

N5331B

### 【作者名】

佐伯 美和

### 【あらすじ】

SNSミルキーどこでもお馴染みになった。中年男オカノ芸能人の愛人だった女マミ繋がるはずの無い二人がSNSで繋がる。繋がるべきじゃなかったのは、どっちなんだろう・・・

## 1 (前書き)

SNSとは【ソーシャルネットワーキングサービス】(Social Networking Service)

人と人とのつながりを促進・サポートする、コミュニティ型のWebサイト。

友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段や場を提供したり、趣味や嗜好、居住地域、出身校、あるいは「友人の友人」といったつながりを通じて新たな人間関係を構築する場を提供する、会員制のサービスのこと。

人のつながりを重視して「既存の参加者からの招待がないと参加できない」というシステムに なっているサービスが多いが、最近では誰も自由に登録できるサービスも増えている。

SNSには、自分のプロフィールや写真を会員に公開する機能や、互いにメールアドレスを知られること無く別の会員にメッセージを送る機能、新しくできた「友人」を登録するアドレス帳、友人に別の友人を紹介する機能、会員や友人のみに公開範囲を制限できる日記帳、趣味や地域などテーマを決めて掲示板などで交流きるコミュニティ機能、予定や友人の誕生日などを書き込めるカレンダーなどの機能で構成されている。

### 最近流行のSNS

この物語は、国内会員数NO1の「ミルキー」の中で起こった。欲望にまみれた人間達の話である。

苛々しながら煙草を取り出した。

「お客さんどちらまで？」

タクシーの運転手がルームミラー越しに聞いてくる。

「上野」

「上野のどこら辺ですかねえ？」

「パークホテル。」

「ええつとどちらの辺りでしょうか？」

「私も知らない。探してっ。」

運転手はその後、何も言わなかった。

車が走りだす。

運転手に当たる必要は、何処にもなかった。

それでも当たらずにいらなかった。

真美は愛人だった。そうこの間まで。5年の愛人生活

終わりは、あっけなかった。

手切れ金代わりに、マンションを貰っただけだ。ありえなかった。

お約束の修羅場。

愚痴る相手がいなかった。

日本最大の会員数を謳うSNS「ミルキー」

そこで全てを書きなぐった。会ったことも無い人達。

真美を捨てた愛人より、はるかに優しかった。

タクシーの窓を開けて、朝の空気を入れる。

冬にして温かい。煙草を吸いながら目を閉じた。

玲子は来ない。

完全にハメられた。

最初、この話は玲子にいったのだろう。

そんな聞いた事も無いようなホテルで ランチなんか食べる気がしなかったのだろう。

私がそうであるように、玲子も同じだろう。

玲子とは、「不倫・愛人の人コミュ」で知り合った。参加している人は、それぞれの悩みを抱えていた。玲子のコメントを見て 好感を持った

割り切れないなら、金を貰え 同感だった。

タクシーは上野に近づいている。ここら辺では遊ばない。

ホテルは聞いた事が無いだけで 案外まともなのかもしれないと思う様に努めた。

相手の男の名前は聞いている。岡野則男（53）会社経営。

なんとなくの性格も聞いている。

それでも、憂鬱さは消えなかった。

池の周りをタクシーは走る。

運転手は、迷う事なくホテルの前に止めてくれた。

さっきの事を思い出し、釣りを貰わずに降りた。

車から降りる。

舌打ちが出た。

ろくなエントランスも無い。

ドアマンもいない。

ビジネスホテルに毛がはえた様なホテルだった。

今までこんなホテルに行った事は無い。

帰ろうかと思ったところに電話。

「マミ？ついた？もう待ってるってえ。」

「なんなのよ！こんな所にマミが行かないの 知ってるでしょ。帰

るからっ」

「ちよつと待つてよ。はずむつて言つてゐるからさあなんとか行つてよ。その前に、行つてもいいよつて 言つたのマミでしょう?」

言い返せなかった。

電話を乱暴にたたみ、バッグに放り込む。

苛々しながら「はずむから」その言葉だけを 繰り返した。  
金には困っている。

その事だけを考えて指定された店を探した。

薄暗い地下の中華料理店。高級からは、かけ離れている。

オカノの名前を言つと、個室に通された。

「ああ、マミちゃんだよな」

椅子から半分腰を上げる気色ばんだ中年男。

岡野則男は、粘ついた視線を真美の全身に向ける。

気持ちが悪い。

気持ち悪いなどと考えていない笑顔をオカノに向けた。

「こんにちは。初めまして」

「うわあ、写メより可愛いなあ。 マミちゃんを、紹介して貰つてよかった。」

「えー、写メつてなあに?」

「髪の毛の子と一緒に写つてゐるのを 送つて貰つたんだよ。僕の写メも見たでしょう?正直、マミちゃんの方が可愛いなあ。いやあ、本当に良かったよ。僕、感激だなあ。」

舌打ちが出そうになる。

髪の毛の子は玲子だ。

オカノの写真を見て、私に振つた。

顔が悪くて金の無い男。不倫だったら何の意味も持たない。

テーブルの下で、こぶしを握る。

爪が食い込んで痛かった。

「はずむから」これもきつと嘘に違いない。

本当にはずみそうなら、玲子が食いつてるはずだ。

馬鹿にされた　悔しかった。

真美は、はずませようと心に決めた。

「写真と違ってたかなあ？僕・・・」

「そんなことないです。あんまり素敵だったから」  
満面の笑みで返事をする。

素敵なところ？

何処にも見当たらない。

白いワイシャツに、センスの悪いネクタイ。

脂ぎった顔に、黒ぶちの眼鏡をかけていた。

好色そうな政治家。　そんな表現がぴったりだった。

「ええつと、何を食べる？」

「何でもいいです。」

「じゃあ、これでいいか。」

1500円のランチをオーダーされた。

何も言わなかった。

勝手に喋るオカノの話を興味深そうに

聞いているふりをした。

笑顔で頷いていれば良かった。

学生時代の話から延々と続く。

ご丁寧に大学の名前までつけている。

普通は、言わないものだ。　オカノの傲慢なのだろう。

お坊ちゃん学校だった。　私はその学校が嫌いだった。

世間知らずの馬鹿な男しか見た事がないからだ。

その後、今の会社を経営し、妻子がいて　子供の年齢まで事細かに、  
話していた。

くだらない。全てが、くだらなかった。

つまらない。全てが、つまらなかった。

煙草に火をつける。

オカノは一瞬、嫌な顔をしたが、気にしなかった。

煙草を吸いながら、算段を考える。

興味があるように頷いてきたが、興味があるのは、オカノの財布の中身だけだ。



1500円のランチが運ばれてくる。

学校の給食を思い出す。

全てが油ぎっていてべたべたしていた。

目の前のオカノと同じだ。

「美味しいでしょう？」

オカノは自慢気だった。

美味しいとは口が裂けても言えなかった。

「家庭的な味ですね。」

皿の中の春巻きを突付きながら答えた。

「そうでしょ、そうでしょ。ここの支配人と僕は友達なんだよ。」  
だからどうした？

そう言いそうになり真美は慌てた。

オカノの食欲は旺盛だった。

見ているだけで吐き気がした。

場の空気が読めない奴は、消えるべきだ。

オカノは常にそうやって生きてきたのだろう。

真美は馬鹿だと思った。

無心に食べるオカノを、豚に代えて眺めていた

適当な会話をしながら 真美はずっと笑っていた。

オカノには、嘲笑だとは わかるはずも無いだろう。

ほとんどの料理を残した。 こんな事は珍しかった。

目の前のオカノ 食欲が落ちて当然だ。

玲子の裏切り 思い出すだけで、笑えなくなる。

オカノは、一人で話し続ける。

食欲が満たされたのだろう。

次は性欲の出番だった。

何もかもが、下品だった。

今までの切ない恋愛話。

言い換えれば、ダブル不倫話。

風俗嬢との店外デート話。

言い換えれば、金で買った話。

紹介して貰った女の話。

言い換えれば、今日の私。

話してるうちに思い出して興奮してきたのか

オカノの額は汗で濡れていた。

目は欲望に血走っていた。

鼻先に人參をぶら下げられてる動物そのものだった。

オカノが今まで遊んできた女と一緒にされるのは、我慢出来ない。

価格の交渉を不意にしてやった。

話の腰を折られた様な不服な表情が 滑稽だった。

オカノの話を真美は大して聞いてはいない。

重要なところだけを、摘み上げて計算機に 放り込んでいた。

叩き出した数字に上乘せする。 出せない金額じゃない。

オカノが、自慢気に話していた内容と顔が、そう告げている。

ただ、オカノが思ったより高くついている。

麻美は、愛人になる前は営業職をしていた。

当時の交渉に似ている。 売りつける物が、化粧品から自分に代わっただけ。

目の前の欲望を抑えられないオカノに 甘い言葉を吐いてやる。

「オカノさんって、ママが会った事のある人の

中で、いちばん、お金もちそうだし、いちばん  
モテそうな感じがするから、甘えちゃったら  
だめかなあ・・・」

正反対の言葉を口走る。

真美は、咄嗟の嘘が案外うまい。

だから、玲子よりいい目を見た。

見ることが出来た。

見れて当たり前だった。

生きるのに必死だった。

そんなことを玲子は知らない。

「うーん。じゃあ、いいよ。それで。その代わり・・・」

変態的な行為だったら断ろう。

その手の行為をオカノとする気は無い。

「その代わり、今日は東京だけど

今度からは、名古屋まで来てくれないかな？ 僕の家、名古屋な

んだ。」

お安い御用だった。

ただ、名古屋には良い思い出が無い。

思い出？

思い出に良いことなんか ひとつも無かったじゃないか。

そう思いながら笑って了解の返事をした。

古めかしいエレベーター

暗い廊下

薄いドア

部屋は狭かった

それでも、友達の支配人に広い部屋に 変えて貰ったと自慢する。

部屋に入るなりに、真美を抱きしめようとする。

うまく交わして、煙草に火をつけた。

オカノの欲望は止まる事を知らない。

時間を稼ぎたかった。

オカノはしつこいだろうと思ったからだ。

テーブルの上にノートパソコン。

見慣れた機種。

5年付き合ってきた愛人と全く同じ機種。

駄々をこねて同じ物を買ってもらった。

懐かしい記憶。

「マミもMacなんだあ。オカノさんとおそろいだね。」

「え、本当に？マミちゃんパソコンとか するの？今さあ、僕ね、ハマッてるのがあって」

オカノは嬉しそうに、パソコンを開いた。 時間か稼ぎは成功しつ

つある。

麻美はくすんだ空を眺めていた。

見慣れたオレンジ色の画面 ミルキーが浮かびあがる。

「今ね、SNSにハマッてて面白いんだよ。 見て見て、僕の日記。 凄いでしょう。」

横からパソコンを覗き込む。

「えー。何それえ。」

「ええっ！ミルキーを知らないの？今、すっごく流行ってるんだよ。 そうだ、今度、招待してあげようか。 そうじゃないと 入会できないんだよ。」

オカノは何処までも得意気だった。

その態度が、真美を更に苛着かせている。

「えー。そうなんだあ。」

「マミちゃんも、やろうよ。招待するからさあ。それより日記読んでよ。」

「凄いでしょ。僕の日記。コメント読んでよ。みんな僕の日記のファンなんだよ。」

ランチの時に話していた内容が 全て日記に記されていた。

元風俗嬢の女とやりました。

今日はどこそこの人妻とやりました。

毎日、セックスの事だけを綴られた日記。

コメントは、ほとんど同じ。

画面上だけの、賞賛。

おざなりの声援。

そんな感想しか持てなかった。

斜め読みしながら、IDとニックネームを 頭に叩き込んで置く。そんな事をしなくても、オ カノは私を招待するであろう。

煙草を何本吸っただろうか。

窓の外は暗くなり始めている。オカノは画面に唾を飛ばしそうな勢いで喋る。

コメントを書いている人の説明。

「マイミル」と呼ばれる双方の日記が読める、自分が選んだ人達の日記の説明。

好きなだけさせてやった。

裸になる時間が短くなるなら、好都合だ。

ひとつの事を

今、ハマっていることを

熱く語る姿を

「少年みたいですね」と言ってる。

オカノはどもりだした。

照れていた。褒め言葉だと勘違いしている。

¥50過ぎの親父が、馬鹿じゃね？真美は心の中で思う。  
真に受けたオカノは照れながらも

「少年みたい」に、また話し始めた。

オカノの話 興味が持てなかった。

オカノ自身 興味が更に持てなくなった。

日記の説明をしながら、思い出して興奮したの だろう。  
いきなり握らされた。

「みんな、大きいって言うてくれるんだ コメントにも書いてくれるしさっ」

息遣いが荒い。

「ね・・凄いでしょ。これですると忘れられなく なっちゃうんだって。みんなしてみたいって。」

心底、頭が悪いんだと思った。

ベッドに押し倒されながら 真美は思う。

一体、オカノの性的な日記に 誰が本気でコメントを書いているのだろうか？

オカノの頭の悪さを、助長させるミルクィは、好都合な遊び道具なのだろう。

くだらない。

そんなくだらない男と、こんな事をしている自分は もっとくだらないと思った。

コメントしてる女以下だろう。

あまりにくだらなくて笑いそうだった。

一枚ずつ、服が剥がされていく。

真美は途中から、カラダと思考を切り離れた。

そうしなければ、全て吐いてしまえそう だった。  
ベッドが軋む。 荒い息遣いで腰を打ち付けてくる。

オカノの汗が、顔に降ってくるのが 常に不快だった。

狭い部屋には、オカノの熱気だけが 溢れていた。 オカノの汗が不快だった。

目を瞑って静寂を待つ。

ただひたすらじつと待ち続ける。

真美の冷え切った 身体を前後に揺らしながら、オカノが問う。

「マミちゃん、僕のことすき？」

荒い息と共に吐き出される言葉。

繰り返される言葉。

自分に言い聞かせてる言葉。

オカノは解っている。

思い込ませないと駄目だと言う事を。

嫌われてると解っている。

こうやって自分の価値を確かめている。

馬鹿だが、寂しい男だと思った。

首に腕を回して耳元で囁く。

「オカノさん大好き。」

「嬉しいよ、嬉しいよ・・・マミちゃん」

そう言いながらオカノは果てた。

マミちゃん可愛いね。

マミちゃん好きだよ。

マミちゃん綺麗だね。

抱きしめられた腕の中で 繰り返される言葉。

髪をカラダを撫でられながら 繰り返される言葉。

温かい腕の中 安心した。

パパにそうされたかった。

兄にそうされたかった。



愛人にそうされたかった。  
ねがいはいつでも叶わなかった。

オカノの腕を振りほどく。  
ソファークセットのテーブルの上。  
ぽつんと置かれた煙草。  
取り上げて火をつける。

人間の体温は余計な情を生む。  
必要以上の他人の体温はいらない。  
真美は全裸のまま、暗くなつた窓の外を眺める。  
不忍池は、黒い穴の様だった。  
暗いぬめぬめとした穴の中で もがく自分を想像した。  
途中で想像を切り替えた、黒い沼に沈んでいくのをオカノに代えた。  
笑顔と共に、白い煙を吐き出した。  
「オカノさん、すつごく気持ち良かった。  
シャワー浴びてくるね。」

元気よく言い残して、 麻美は狭いユニットバスに逃げ込んだ。  
ねがいはいつだって叶わなかった。  
欲しいものは掴もうと思うと いつも指の間からすり抜けていく。  
そう、この石鹸の泡の様に。  
普通の人が当たり前の様に 手に入るものを欲しかった。  
感じてみたかった。

現実には簡単じゃなかった。  
掴めないことに、手に入らないことに 必死でもがき、掴もうとした。  
した。

冷たくあしらわれた。  
気持ちが萎えてゆく。  
凍えた気持ちを、誰かに暖めて貰おうとは、そのうち思えなくなつた。

目に見える残ったものだけが現実だった。  
見えないものを、掴もうと思わなくなった。

狭いユニットバスで、身支度を整える。

最後に口紅をつけた。

オカノは、裸のままパソコンに向かっている。

一種のミルキー中毒だろう。

「マミちゃん、アドレス教えて。今、招待するから」

フリーメールのアドレスを口にした。

「これで、マミちゃんの日記も読めるね。わからなくなったら、いつでも電話してくれて

いいから。あ、連絡先、聞いてなかったね。」

オカノと連絡先を交換して、部屋を出た。

エントランスの無いホテルには、タクシーも車も止まっていない。

何処を歩いたら駅に着くのだろう。わからないまま、黒い池の周

りを

歩き出した。冬の風は真美の気持ちと同じ様に冷たかった。

池の周りから大通り。

大通りに洋服屋、電気屋 靴屋 カラオケボックス ファッションビル。

通りに面した場所では、チーズケーキが売られている。

「出来たてをどうぞ」

店員の作り笑い。甘い匂いに吐き気がした。

流れに沿って上野駅。日比谷線の改札を探した。

家路に急ぐサラリーマンとOL。同じ年代なのに、違和感を感じる。

五年前は、そんなことを感じなかった。

何処をどう間違ってしまったのだろうか。

ただ、同じ事は

疲れた身体を引きずって 電車で揺られていることだけだ。

降りる人間と乗る人間の異なる駅。

乗り込む人間は疲れ 降りていく人間は浮かれている。

そんな駅で降りる。

階段を上がる。

目の前に本屋と花屋。

本屋に立ち寄ろうか迷うが止めた。

花は枯れるから、絶対に買わない。

貰ってもすぐに捨てる。

六本木通り 人の流れが多い。

車の流れは、渋滞で止まっている。

いつだって、人も車も溢れている。

ヒルズの展望台を目指す恋人達が目に付いた。

冬のイルミネーション。

体を寄せ合うのに都合の良い季節。

そんな時期が真美にも、あったのだろうか。

今となつては思い出せない。

麻布警察署を過ぎて、脇道にそれる。

よく利用していシテイホテルを通過する。

急に静かになる細い道。

コンビニを左に曲がる。 暗い坂を下る。

何も考えない。

考える事を放棄した。

色々なことが、この数ヶ月で いや、会社を辞めてから いや、

真美が生まれてから

ありすぎた。 全てを放棄したかった。

出来なかった。

だから、こうして生きている。 仕方の無いことだった。

坂を下った先のスーパーで買い物をする。

散歩の途中の犬の頭を撫でる。

愛人の飼い犬は、元気だろうか。

そんなことを思い出す。

スーパーの袋は重かった。少し歩くとビニールが食い込み、指先が冷たくなった。

肩を落として通りを歩いた。

見慣れたマンション　もう、誰も来ることは無い。

一時期、写真週刊誌の記者に張られていた。

真美の愛人は、芸能人だった。

郵便受けを確認する。

ダイレクトメール。

つまらないチラシ。

請求書。

乱暴にスーパーの袋に放り込む。

玄関を開けて、大きい靴を探してしまう。もう脱ぎ散らかされることは

無いと解っている癖に。暗く寒々しい部屋。

電気をつけてぼんやりする。

今年のボジョレーをなんとなく買った。

味の事は、わからないが、ひとりで飲んでいる。

5年間、ひとりで飲んだ事は無かった。

飲みながら真美は、泣いた。

着信音で目を覚ました。

携帯電話にメール。

オカノから4件。　開く前からうんざりした。　飛ばした。

玲子から2件。　飛ばした。

起きがけのコーヒーをアイスオレから　ホットコーヒーに変た。  
だいぶ冷え込む様になってきている。

愛人の別荘で最後に過ごした気温に似ている。

あの日の朝、全てが終わった　真美が、終わらせた。  
あれは、いつの事だったのだろう。

オカノのメールは、毎日、飽きもせず送られてくる。うっかり返事をすれば、即座に電話がかかってくる。駆け引きが必要だった。

「僕の日記読んだ？感想をコメントしてよ」

真美の事が晒されている、ミルキー日記。良い気分には、ならない。失態でしか無い。適当に相槌を打っておく。

ロクに目も通していないオカノの日記。

日記には真美の事だらけだった。

オカノのミルキー中毒ぶりには、ウンザリした。

私の足跡から、ログイン時間から 全てを監視される。

メッセージの返事が無ければ携帯にメール。それにも返事が無ければ何回でも電話が鳴る。 辟易した。

常にログインしたまま、放置した。

オカノの束縛は、想像以上だった。

束縛されることは、誰かに捨てられる事と 同じくらいに嫌いな行為だった。

「距離が離れてるし、もっとマミちゃんのことを僕は知りたいんだよ。」

適当に日記を打ち込む。

「マミちゃんは、感受性豊かで繊細なんだね。僕が守ってあげなくちゃ駄目だね。」

「ありがとう。マミ、嬉しいっ。」  
文字だけを見れば、誰にも解らない。  
平べったく感情のこもらない、棒読み言葉だとは、  
きつと解るはずも無いだろう。

「感受性の豊かなマミちゃんにプレゼント。」オカノと2度目に会った時に、東京で開催されているチケットを貰った。

「本当は、僕も一緒に行きたいんだよ」  
お断りだ。

「凄が残念……。マミ、寂しいなあ」  
思ってもいない事を口にした。

チケットテーブルに並べる。

美術館

ミュージカル

映画

1枚の物もあれば、2枚の物もある。  
手始めにミュージカルから行った。  
外に出るのは、久しぶりだった。

乗りなれない電車。  
時間の配分が出来ない。  
到着した時間は、開演の5分前だった。  
しつこいオカノのメール。  
無視した。

初めてのミュージカル。  
観かたが、解らない。  
戸惑った。

前半が終了し休憩になった。

「心で観ればいいんですよ。」

隣の席から声がした。

30代の後半位だろうか、着慣れたジャケットに 白い Cotton のシャツ。 日焼けした笑顔が清潔そうだった。

その言葉のままに 後半は、何も考えないで観た。

あるシーンから涙が止まらなくなった。

舞台が終わった事に気づかないまま パンフレットを握りしめて放心していた。

「何処のシーンが好きでした？」

隣から優しい声が聞こえる。

涙でぐちゃぐちゃの顔のまま、思った通りの 感想を言い続けた。

思い出すだけで、涙が溢れてきた。

劇場を出て、そのまま喫茶店に入り 話し続けた。

誰かと、駆け引き無く話す事が新鮮だった。

真美はバッグから、映画のチケットを取り出した。

一緒に映画に行こうと誘っていた。

こんな事は、初めてだった。

外は雨が降り出していた。

夜の雨。

嫌いでは無い。

いつだって真美の記憶の中では雨が降っていた。

傘もささずに、冷たい雨の中を歩いた。

気持ち、良かった。

マスカラの取れた酷い顔のまま、喫茶店で話していたことを思い出す。 舞台の内容を思い出す。



猜疑心が強くて人間と仲良くなれないきつね。

どうやったら、友達が増えるのか 必死で考えるきつね。  
仲良くなりたい。

でも、出来ない。

苦悩する様に心が打たれた。

どうして初めて会った人に

あんなに話してしまったのだろう。

真美にも、わからなかった。

びしょびしょに濡れたオフホワイトのワンピース。

脱ぎ散らかしてバスルーム。

オレンジ色の明かりが灯った中で熱いシャワー。

オカノの事は忘れた。

温かい雨を浴びた。

裸にバスタオル。

髪を伝って雫がこぼれる。

冷蔵庫から缶ビール。

苦い炭酸を一気に飲みほした。

喉で弾けて胃に落ちる。

身体の、内側から熱くなる。

土曜日の映画。

渋谷の東急に午後1時。

こんな風に昼間に誰かと会うのは 久しぶりだった。

真美は前日から緊張した。

今までに無い類の緊張だった。

水を挿すようにオカノからメール。

携帯を電源ごと落とす。

一瞬にして黒い画面。

上野の池を思い出す。

オカノを池に沈めたみたいで気分が良かった。  
遅刻しないように。

映画館で眠らないように。

睡眠薬を飲み込んでベッドにもぐる。

明日は晴れるようにと、ねがいながら。

緊張の為に眠れない。

睡眠薬を追加する。

眠りが訪れたのは、明け方だった。

土曜日の渋谷。

誰かとの待ち合わせ。

金の絡みの無い待ち合わせ。

久しぶりだった。

温かそうなジャケットに白いシャツ。

今日の日差しと同じ様に温かい笑顔をした  
チバが手を振って歩いてきた。

土曜日に映画。

シアワセだった。

世の中の休日を普通に過ごせる事に。

純粹に会話が出来る事が

シアワセだった。

落ち着いた裏通りの喫茶店。

土曜日だけあってそれなりに混んでいる。  
普通の珈琲。

いつもより美味しく感じた。

相手が違うだけで、味は変わる。

値段が張るから美味しい訳では無い。

一緒に過ごす人間で変わるのだ。

映画の感想。

うまく言葉が繋がらない。

困った顔を見せると チバが笑顔でリードしてくれた。

日が暮れ始める。

話したい事が沢山あった。 場所を移動した。

ごはんまりしたとイタリア料理店。

ワインも料理もチバが選んだ。

飲みながら、食べながら、会話のキャッチボールを愉しんだ。

今までの男と違って、チバは卑猥な笑顔は、見せない。

食事の後に、当たり前前のようにある行為。

今までが、ずっとそうだった。

男達は、いつもその事を想像しながら料理を食す。

その表情を見逃す事は、いつも無かった。

不躰なその視線が、大嫌いだった。

チバには、それが無かった。

当たり前前の事だ。

真美には、当たり前前では無かった。

だから新鮮だった。

2人で、ワインを2本空けた。

足下が覚束ない。

いつだって崩れ落ちそうだった。

今、置かれている状況と変わらない。

いつ崩壊してもおかしくない生活。

解りきっている現実。

横断歩道の信号が点滅をする。

「真美ちゃん、走ろう。」

チバが手を握って走り出した。

道路を渡った後も、繋いだままにしていた。  
その手を振りほどけない。

振りほどく理由が見あたらなかった。

人が多くなってきた。

駅が近づいている。

ビルの影で立ち止まる。

「ねえ、チバさん。」

「なあに？」

「また、誘ってもいいですか？」

「うん。いいよ。君といると楽しいからね。」

「ありがとう。」

自分からチバの頬にキスをした。

繋いだチバの左手の指輪が 少しだけ気になった。

クリスマス仕様の街灯が揺れている。

自分の気持ちも揺れていた。

「終電、間に合いますか？」

ゆっくり歩いた。

「まだ、大丈夫だよ。」

「チバさんのお仕事ってどんな感じですか？」

俯いて眉間に皺を寄せて考え込む。

何か不味い事を聞いてしまった様な感覚。

一気に気持ちが沈み込む。

慌てて話しの内容を変えようとした。

チバは遠くを見つめながら答えた。

「うーん。人さらいかな。」

「は？」

「僕はね、いいなあって思う子をさらったり拾ったりするのが、

僕の仕事なんだよ。

もちろん他にも あるんだけどね。 あはは。」

「じゃあ、私もさらわれちゃうんですか？」

期待

チバは面白かった。

退屈しなかった。

気持ちが清潔だった。

周りにいる男と違った。

不安

表と裏の顔の使い分けを心得ている。

今までの男と同じ。

えげつない行為を繰り返す。

気持ちも身体もバラバラの行為。

脳裏をかすめた。

「僕は、真美ちゃんをさらったりも、拾ったりも しないよ。なんだろうな、

影響されちゃったって いうのかな。僕は、真美ちゃんの生きてる瞳が、凄く好きだな。」

好奇心いっぱいの澄んだ瞳で覗かれた。

その視線が心に痛かった。

「今はね、瞳が死んでるヤツが多いんだよ。

だから、凄く新鮮だ。今日は、一緒に過ごせて良かったよ ありがとうね。」

遠くで歌声が聞こえる。

路上で誰かがギターを弾いて唄っている。

何処かで聴いた事があるが、思い出せない。

「誰の曲？」

「エリッククラプトンのチェンジザワールド。ねえ、真美ちゃん 世界は変わらないけど、変える事は出来るんだよ。」

荒々しいクラプトン。

全く別の曲に聞こえた。

叫びにも近い歌声が

冷たい空に響いてる。

チバは悲痛なクラプトンに向かって

駆けだしていた。

「ちよつと、さらってくるから。」

真美の返事も待たずにチバは駆け出していく。

のんびりと後を追った。

もし世界が変わるなら・・・

真つ黒い夢を見ている。

何処へ向かってても暗闇だった。

泣いたりも叫んだりもせずに、ただ走っていた

その夢を幼い真美は毎晩の様に見続けた。

部屋は凍える様に寒かった。

千駄ヶ谷の実家。

あの家が温かった頃なんてあったのだろうか。

煙草に火をつけて当時を思い出す。

母親の記憶はほとんど無い。

花が大好きな人だった。

球根から2人でチューリップを、毎年植えていた。

植えられなくなった時は、いくつだったろうか。

幼稚園に迎えに来てくれなかった。

先生に送られ帰った自宅には、もう母は居なかった。

父に尋ねても、「お父さんは忙しいから」の一点張り。

そんな記憶だけが薄ぼんやりと残っている。

数年して父が、知らない女を連れてきた。  
名目上の「お母さん」って女。

ついでに名目上の「お兄ちゃん」も出来た。  
最初のうちこそ、父は家に帰ってきていた。  
周りからは楽しそうな家族団欒に見えただろう。  
真美にとっては、全く楽しくなかった。

女は私には厳しかった。

高校も見栄えのする付属に入れる事しか頭に無い女だった。  
成績が下がれば、いくらでも嫌味を言われた。  
交友関係も規制された。

父は、また帰らなくなった。

「仕事が忙しい」

母親もロクに家に居なくなった。

「色々と付き合いがあるの」 嘘だった。

ホストクラブに、せっせと通勤していた。

食卓には、冷めた総菜か冷凍食品。

こんな毎日を送っていた。

居場所なんか何処にも無かった。

唯一、兄だけが優しかった。

高校に入ってから、更に面白くなかった。

女は家ではヒステリックだった。

父の金を狙って再婚した女。

ホスト狂いがバレてから父は、女に財布を預けなくなった。  
門限も交友関係も全て規制された。

女の小遣いは食費として、毎日3千円渡される。  
全く同じ事を真美は、女にされた。

違うのは、毎日3千円では無く、昼食代込みで、

月の小遣いが3千円だった。  
文句を言う気にも、なれなかった。

友達の家族。

幸せそうだった。

聞くのが苦痛だった。

少ない小遣いでは 友達とつるんで遊びに行く事は 出来なかった。

だから、誰とも遊ばなかった。

今、思えば父は、オカノと同じタイプだったのだろう。  
家庭ごっこだけで、情欲に溺れた父。

母が居なくなる理由が、今ならわかる。

女はオカノと、やりまくる人妻みたいなもんだ。

都合が良かっただけだ。

帰る居場所なんか初めから無かった。

存在する意味すら失いかけた毎日だった。

帰るのも嫌。友達とは遊べない。

門限まで毎日、一人でぶらぶらしていた。

人気の少ない通りで、父親くらいの歳の男に声をかけられた。

そこからか・・・いや、その前から、転落していた人生だ  
ったんだろう。

渋谷の路上でギターを聴きながら、真美は過去を静かに思い出し  
ていた。

ギターの音が、耳に心地良かった。

12月10日

どうやら私の日記がオカノに横流しされつつあるようだ。



私が誰かに書いたコメントまでも、綺麗にコピーしてメッセージで送っている奇特な人がいるらしい。心当たりのあるヤツ、名を名乗れ！！

ミルキーに日記を書き込む。

オカノに招待して貰う前から、真美はミルキーで日記は書いていた。そう、赤裸々に書いていた。本名こそ出さなかったが、今までの愛人との日記も書いていた。最初の頃は、全体に公開していた。ミルキーの会員が増加し始めた頃から、日記の公開を友人までとした。今までの内容が、グロテスクだった事もあり、口コミで噂が広まった。

非公開にしてから、日記を読ませてくれと、毎日、何十通とメッセーじが飛んでくる。最近は、全てを断っている、

オカノに招待して貰ったアカウントで、ミルキーに接続するメッセージを開く。

ねえ。オカノって誰？ マミは、この人と知り合いなの？

一緒に貼り付けられていたアドレス。

紛れもなく、赤裸々に書いてる真美のアドレスだった。

全てはそこから始まった。

オカノはオマエ。書いてるのはm私だ。とタイプしたかった。

出来ない。

出来る訳が無い。

金がかかっている。

シラを切り通せ。

切り抜ける。

ねえ、オカノに抱かれた後にあの人に抱きしめて

貰えて嬉しかったって、あの人って誰？  
オカノってボク？  
ボク・・・マミが信じられないよ。

その手の内容のメッセージの連打。  
何故、そこまでオカノが知っている？  
誰かが流しているのだろうか。  
何の為に？目的がわからない。

ねえ、マミ答えてよ。

金で買ってる女の事なんか、最初から信じない方が良いのだ。  
甘い夢を金で買ってるだけだ。  
オカノはゲームの根本をわかっていない。  
もう少し夢を売ってやろうと思った。

シラを切り通す。

煙草がジリジリと灰になっていく。  
考える。

っていうか、この人だれ？

マミ、こんな人知らないよ。

それに、マミが信じられないって酷くないですか？

オカノさんこそ信じられないよ。、色んな女を、

抱きまくってるメールとか、日記じゃない。

マミだって信じられないよ・・・哀しいです・・・。

悲壮感だらけの、メッセージを飛ばす。

笑い転げそうだった。

いや・・・そういうつもりじゃなくてさ・・・。

僕のマイミルさんが、なんか心配してくれちゃってさ。

だからって、会ってもいない人を信じるの？

マミとの事は、会ってても信じてくれないんだ。

オカノさん、その人達に、踊らせれてるんじゃない。  
マミ、超、傷ついた。

もう、オカノさんに会いたくないかもお……。

一か八かの賭けに出た。

オカノを踊らせてるのは紛れもなくマミだった。

正論であって正論じゃない。

有無は言わさない。

絶対に言わせない。

たたみ込んでシラを切り通せ。

ここは抜けるしかない。

先日、金額を上げて交渉をしたばかりの話だ。

ここで終わらせる訳には、いかなかった。

金は要る。

愛人と終わったばかりで、収入源が無かった。

今、オカノはどうしても必要だ。

だから一歩も引けない。

引かない。負けられない。

うん……解った……。

僕は、マミを信じるからね。だから、明日、会おう。ね。ね。  
サントさんからのプレゼントだよ。

信じるも信じないも勝手にすればいい。  
最初からオカノの事なんか信じちゃいない。

信じられる訳が無い。

サントのプレゼントは金だけで充分だ。

ウンザリしながらログアウトした。

午前3時。玲子から電話がくる。

言われたアドレスをメモって、またネットに、接続した。

午前5時。

考える事が山積みになった。

全ての日記が、巨大掲示板に晒されていた。

ご親切に、同一人物としてアカウントを両方とも、晒されている。

オカノにしか言って無い事までも、書き込まれている。

自分の事を晒されるのは、別にかまわなかった。

ただ、今まで日記に書いてきた唯一の友達 ユウジの事を中傷された。それはオカノしか知りえない情報のはずだった。

チバのこともまた。細かく書いてあった。

チバも全く関係無かった。チバに関してはオカノも知らないはずだった。

何の意図でこんなことをするのが、全く見えない。

オカノに惚れている女だろうか。

ネットの世界だが故の理想像だろう。

それとも、オカノから金を貰っているという妬みだろうか・・・

オカノのマイミルは執着心が強い。

眠りに落ち始めた所でオカノから、何度も電話で起こされる。「

マミと、早く会って 長い時間を過ごしたいから」

オカノは掲示板に全く気づいていない。

本当だろうか？

誰も信じないことにした。

既婚者と付き合う時には、絶対にしない

ラメ入りの化粧を施す。

服に付きやすいファンデーションを塗る。  
かなりきつめの香水もつけておいた。

今日、ボロを出したら全てがおじやんだ。

くだらない事だが、保険はいくらでもかけて  
おいた方が無難に違いない。

外は晴天だった。

真っ青な空が憎らしかった。

なんでこんな日に、新幹線に乗るのだろう。

なんで大嫌いな名古屋に向かうのだろう。

全てに毒を吐きたかった。

そんな時間は、無かった。

新幹線の中で、更に考える。

この時間だけしか、もう残っていない。

品川からの90分間。

その間に、答えを出さなければならない。

ボロを出した方が負ける。

負ける事は一向に構わない。

その後に、徹底的にやり返せばいいだけの事だからだ。

誰もがそれをやらないで、泣き寝入りする。

馬鹿げた話だと、真美はいつも思う。

揺れる新幹線。

景色も見ないでひたすら考える。

先日、送りつけられて来たメール。

近所の人妻との素晴らしく相性の合う情交話。

頭に全て記憶させてある。

やっぱりお互い既婚だといいよね。痒いところに手が届くっていいかね。なんか気楽なんだよね。僕が甘えられるしね。

電話の度に聞かされた。

毎回、違う女の話。デリカシーのかけらも無いオカノの言葉  
忘れられない。忘

人妻以上の何かと、自分だけの何かを織り交せて  
今日はしなければならぬだろう。

母性本能を全面に、オカノの父性をくすぐる何かを織り交せて。  
良い参考書だなと暗く嗤って自分を誤魔化した。

あとは、ひたすらオカノに話しをさせる事だ。

とにかく今日は自分は聞き役に徹した方が無難だ。  
ボロは絶対に出せない。

くだらないドラマとか、その辺の話を頭に用意しておく。

ポイントで聞かなければならない箇所が6箇所。

どのタイミングで、どの会話で聞くかを考える。

掛川駅を通過しました・・・

表示が出る。

時間が無い。

考える。

必死に自分に問いかける。

名古屋の手前で答えが出た。

これから何をしようとしているのだと思うと

泣きそうになった。

泣けなかった。

無意識に、携帯に手が伸びる。

大好きなあの人に「会いたい」

たったひと言だけ、何も考えずに送信した。

送信してから思った。

こんな汚い駄で、どう会うと言うのだろう。

どう思われるのだろう。

もう一度送信。

ごめんなさい。

腕にすがってはいけない。

アナウンスが流れる。

まもなく名古屋です・・・。

オカノとのこれからを考えると、シラフでは やっていけない。

昔出された かなりキツイ抗鬱剤。薬剤師の友達にそれだけは、飲まないでくれと泣いて頼まれた薬。

ずっと持っていた。

躰は汚れても心だけは汚れたくない。

そう願いながら抗鬱剤を取り出し1錠を 口の中に放り込んだ。

この後、酒も飲むから体内への吸収は格段に良くなる事だろう。

ホームに降り立った時に唱える。

今日、すべき事を何度も唱えて歩いた。

いくら薬が効いても絶対に忘れてはいけない。

さつき決めた事を守り通す。

たったそれだけだ。

待ち合わせ場所でオカノを見つけた時には 満面の笑みで歩み寄ろう。頭の中では、全く違う事を考えながら。

名古屋駅のロータリー 混雑していた。

車を探すのに時間がかかった。

偽物の満面の笑み お得意だった。

車の車種とナンバー 頭に刻み込む。

泣きそうな顔と声を出す。

「ママ、信じて貰えないと思ってたから超哀しかった。

でも会えてホントに嬉しい！あ、友達にメールしなくちゃデートすっぱかして来ちゃったから。ごめんねえ。」

「デートをすっぱかす」その言葉にオカノが反応する。  
しかし、どうする事も出来ない。だから言った。

渋滞が解消された所で、携帯でユウジのアドレスを 呼び出す。  
車種とナンバーを打ち込む。

横目でオカノを見るが、運転とその後の欲望だけの顔 しか見えなかった。

鼻の下が伸びた豚ってどんなだろう？

そんな事を考えた。

タイトル「豚で」送信。

「ねー。昨日のメールなに？あれ酷くない？

誰なのが言ってるの？教えてよお！ありえないじゃん。」

むくれた顔で窓の外を眺める。

話したくて仕方ない、オカノの空気が手に取る様に読める。

「マミも知ってるよ。」

「ええっ、何それ誰？男？女？」

「だからさあ、そういうのマズイでしょ。」

「何がマズイの？訳わかんないんだけど。」

マミ、他人に嘘つかれるのが一番嫌いなのを

めちやくちや理解してくれてるのはオカノさんだけでしょー。

超、酷くない。マジむかつくんですけどお」

一番の嘘つきは紛れもなく真美だ。

そして、一番理解しているのは紛れもなく、全部知っているユウジだ。

新幹線の中で考えた事を実行に移すだけ。

拗ねて甘えて父性本能をくすぐってやる。

唇を噛みしめてしばらく黙っていた。

沈黙に耐えきれなくなったオカノは話し出す。

「女だよ。」

「えー。なんでその女がそんな事すんの？嫉妬されてるんじゃないの？」 ほからかに笑う。



「彼女の日記に執着してるマイミルの女だよ。」

執着してるのは、オマエがだろ。

心の中でそう思う。

だいたいのは検討はついた。

しかしオカノ本人に言わせないと全く意味がない。

「その彼女の日記は。相当、面白いんだろうね。私も申請してみよっかなあ」

面白いに決まっている。ここに本人が居るのだから。

「でも、誰でも読めるんじゃないの？」

「それが、読めなくなっただよ。僕も彼女とマイミルしてたからね。本当に面白かった

んだよな。きまぐれな人みたいだったから、マイミル削除も一氣にするような人で、

その時に、僕は削除されちゃったんだよね・・・。」

初耳だった。危なかった。

「それで、もう読めないって諦めてただけど。最近になって送ってくれたのが

カナだよ。でも、カナも切られちゃたみたい。」

推測は大当たり。

いずれ、オカノは自分で名前を言った事を後悔する事に なるだろう。

保険は多いに越した事は無い。

「へえ。じゃあカナさんももう読めないんだ」

「そう、現状はね。でもね・・・」

まだ話の続きがあった。

「でもね、僕のマイミルさん達が、真相を知りたいからって、彼女のマイミルに頼んだり

申請だしたりして、日記を入手して、コミュでまわし読みしてるんだよね。」

いい加減にも程がある。

マイルを一気に減らしたが故に、巨大掲示板に書き込まれた。  
オカノのマイルの異常な執着心。  
鳥肌がたった。

「そ・・・そんなに面白いんだ。」

「うん、僕が一番彼女を理解してたんだと思うんだけどね・・・。  
何回も読み返したし、テキストで保存もしてるんだ」

嘘も良いところだ。何も理解なんかしていない癖に。

毎回の事だが、昼過ぎに名古屋に到着する。

すぐに連れて行かれるのが、ラブホテル。

食事はコンビニ。

信じられない。

酒とブラック珈琲、ミルクたっぷりの珈琲牛乳、それに濃厚牛乳  
を

新幹線の中から、リクエストしておいた。

コンビニ袋は重かった真美に持たせて入り口に向かう。

全てがありえない。

紳士ズラの裏はこんなもんだ。

解りやすい馬鹿なオカノ。

もてると勘違いしてるオカノ。

お笑い草だった。

オマエ、本当に私の日記を何回も読んだのか？と 問いたくなる。

真美の愛人は、美食家だった。

いつも美味しいお土産や、レストランに連れて行ってもらった。

なかなか会えない特別な2人だから・・・。

限られた時間だからこそ、美味しいものを食べよう・・・。

当時の愛人の言葉に、かなりのコメントがついた。  
雑誌の見出しを飾った言葉でもあった。

オカノもこの言葉は、知っている。

オカノと食べる飯なんて　どんなに旨いモノでも不味く感じるだろう。

コンビニで丁度良い。　そう思う事にした。

頭に叩き込んでおいた、人妻との情欲メール。  
ホテルに入って思い出す。  
なぞる様でなぞらない展開を自然にしていくな。

「ちょっと早いメリークリスマス！」

缶ビールを持ち上げたオカノは機嫌が良かった。  
どうでも良い会話。

仲良しの友達の話。

年末のテレビの話。

もう今年も終わる。

年賀状の話にすり替える。

「ママさあ、年賀状を、毎年書いてるんだけどさあ」

嘘　　- 書く人なんかいやしないじゃないか。

「なんか郵便番号が覚えられないんだよねえ。」

奈良のさあ、前に話した死んじやった彼氏とは  
文通してたから、すぐ言えるんだけどさあ

奈良って633-00xxでしょう？

大阪に住んでた時も言えたかなあ、えつと確か

550-00xxだったかな？今の部屋の分かんないんだよねえ・・・。  
105だったけかなあ？あれえ？

そういえば名古屋って3から始まるの？関西方面って  
全然わかんないやあ。」

3から始まるのは埼玉だ。

よくここまでいい加減な話が出るもんだと自分を褒めた。

オカノは酒に酔って饒舌だった。

「えつとね。名古屋は440-00xxだよ」

「へー4なんだあ。凄い意外いー。」

今の郵政局に感謝したい。

7桁になると場所の指定が出来る。

間抜けなオカノ。笑いをかみ殺した。

「あ、ごめーん3時に電話してって友達いたんだ　ちよつといい？」

7桁の数字を打ち込んで発信した。

繋がるハズの無い電話。

コール音だけが響く。

「ちえー、全然繋がんないやあ。困っちゃうな。」

困るのはオカノだろう。

鼻の下を伸ばしたオカノ。

全てを信じ込んでいるオカノ。

電話を放り投げてオカノに抱きついた。

情欲シーンをマミオリジナルに書き換える。

しかたなくオカノの欲望に任せる。

ユウジの言葉が鳴り響く。

ユウジは、親父の借金を肩代わりしてウリセンでバイトしていた。

「頭と軀を切り離せばどうって事なかったな」

「セックスなんて所詮演技で成り立ってるだけだろ。」

シナリオをなぞる。

オカノは本当に天真爛漫の馬鹿だった。

私がオカノの日記を読んでいる事を忘れている。

解りやすく簡単な男だった。

全てがくだらなく見える。

でも、まだやる事は残っている。

父性はくすぐった。

今度は人妻には出来ない母性を出す。

たったそれだけだった。

きつと途中で抗鬱剤が効れたのだろう。

やりながら大好きな人を思い出す。

奈良の彼氏を思い出す。

一体、何をやってるのだろうか。

急に彼らに申し訳なくて涙がこぼれた。

溢れる涙 - 止まらない。

抑える事が出来なかった。  
オカノは勘違いしていた。

「マミ、そんなに気持ちいいの？  
もう僕のモノ忘れられないでしょう？ いいでしょ？いいでしょ？」

気持ち悪さに、発狂しそうだった。

「オカノさんが・・・マミを信じてくれて嬉しいの・・・」  
泣きながら言う。

全くの出鱈目の言葉。

感極まったオカノはそれで放出した。

真美は、しばらく偽物の痙攣を繰り返した。

煙草を吸いながら、だらだらとした話をする。

煙草を吸わないオカノは、煙草を吸う女とセックスを、する時は自分も吸うらしい。

キスをする時の紳士のマナーだと言っていた。  
だからガンガン吸わせた。

「私、なんか喉が乾いちゃった。何か飲むう。

オカノさんも凄い汗だもんね、飲むでしょう？」

ああ、そうだ！オカノさん最近苛々してたでしょう？」

牛乳好き？だったら飲みなよ。カルシウム不足は  
苛々しちゃうんだよ。不足してるんじゃない？」

相手を気遣った表情と言葉。

有無も言わず真美は。牛乳にストローを突き立てオカノに手渡す。  
オカノは素直に牛乳を飲んでた。

まだ渴きが癒えないらしく、次は自分でブラック珈琲を飲み始めた。  
心の中でほくそ笑んだ。

真美は、チューハイを飲み続けていた。

冷たい牛乳＋冷たいブラック珈琲＋吸い慣れないきつい煙草。  
後は時間の問題だった。

オカノはベッドの上で、真美はソファアで安っぽいガウンを着て  
色々くだらない話を交えながら問いかける。  
もうベタベタするのは勘弁だった。

放出した後の男は、何でも話す。

まず奥さんの名前を聞き出した。

保険クリア

友人の子供の受験の話や、近所の子供について話す。  
全部が出鱈目。

「ママがいつか結婚して子供が生まれたら何て  
名前にしようかなあ。友達んところは里奈でしょう  
杏里でしょう。可愛いよねえ。あれ？オカノさんちも 女の子だよ  
ねえ。」

前に言ってたよね。なんだっけ？ はるかだっけ？」

「違うよ、春菜と未来と和也だよ」

「うわー3人もいたんだ。すごいねえ。」

保険クリア

「菜穂、ちよつとごめん、何か腹が痛い。 トイレ行ってきていい  
か？」

悪魔の三原則      お腹の急降下

「いいよお、長くなりそ？」

「うーん、そんな感じだな。」

オカノの額に脂汗が浮かんでいた。

真美は笑うのを堪えながら、バッグを漁った。

「じゃあ最近マミが、はまってる本を持ってトイレに、いきなよ。エロ描写がいいんだコレが。インクの臭いが効果なんでしょう？」

オカノが、エロに食いつかない訳は無い。

本を渡す。

部屋を出る前に考えて来たストーリー！。

オカノは村上龍じゃ駄目だ。

徹底的な官能小説を持ってきた。

本をひったくる様にトイレに駆け込むオカノ。

トイレの様子を確認する。

最後にしなくちゃならない保険。

無造作に置かれた財布。

万札で厚くなった財布。

本当にケチな男だと思った。      金に興味は無い。

今は、免許証に興味があった。

「車に乗る奴は、大抵が財布に免許いれてるぜ」

渋谷で遊んでた頃の、男友達に昨日聞いた。

確かに周りもそうだった。

有線の音量を上げる。

トイレを流す音が聞こえる程度に。

免許証はあっさり財布の中で見つけた。

オカノの名刺まで出てきた。

オカノは、まだトイレを出る気配が無い。



私は有線に合わせて出鱈目に唄う。

オカノはエロ描写を、読みふけってるか  
お腹の急降下と格闘しているのだろう。

携帯を開く。

サイドにあるシャッター音が 出る部分を指できっちり抑える。

ぶれない様に写メで保存。 数枚撮っておいた。

頭の中にも、住所と会社名は記憶した。

そつと元通りに免許証と名刺を戻した。

憶えておいた妻と子供の名前、会社名に自宅の住所。

ユウジ宛にメールした。

愛人もそうだったが、オカノもツメが甘い。

自分は大丈夫だとタカをくくっている。 だからやられる。

真美が、何回か過去にやられた様に。

それから真美は、いつも何も持ち歩かない。

最低限度の物しか持ち歩かない様にしたのだ。

想像力が足りなさすぎるから、こうなる。

自分が、その馬鹿の一員だった事に、涙が出そうだった。

行きの新幹線で考えた事は、全て実行出来た。

車のナンバーはユウジに頼もう。

社用車かもしれない。

ユウジは、ハッキングなんかはお手の物だった。

トイレを流す音がする。

「ねえマミ。これ凄く面白いね。貸してよ」

「うん、いいよ。で、大丈夫だった？」

「マミ、風邪移したでしょう。酷いよお。どうなるかと思っちゃったよ。」

（いや、オマエの家は、これから、どうなるんだろうな。）

「きゃあ、ごめんねえ。」

嗤いながら謝った。

全てに対して御免なさいだ。

それでも苛立つ気持ちは消えなかった。

爆弾はいつか投下される。もう落とされたも同然だった。

その為により強力な爆弾を用意しただけの事だ。

苛立つ気持ちは抑えられない。

それでも抑えないといけない。

勘に障る言葉　既婚者同士だと時間とか解りやすいんだよね。

ちよつと困った顔して笑って見せる。

腹の中は、憎悪で埋め尽くされている。

帰りの支度をして金を受け取ってチエックアウトする。

車の中で、まだ腹の調子が悪いと言うオカノを、神妙に心配するフリをした。

高級車にクソを漏らしちまえ。

心の中で嗤った。

名古屋駅で車を降りる。　拾って貰った場所で。

とても寂しそうな顔をしながら。

脂汗を浮かべたオカノを見て。　ほくそ笑んだ。

オカノには、寂しそうな笑顔に見えた事だろう。

車を名残惜しそうに見送りながら、舌打ちをする。

苛立ちは消える事は無い。

名古屋　　ロクな思い出が無い。

今回で更に証明された。

冷たい風を受けながら即座に駅に向かう。

## 新幹線の券売機

貰った金を無造作に突っ込み、窓際の喫煙席を確保する。

1番端の喫煙車両　死んだ元恋人を思い出す。

一体自分は何をしているのだろうか……

苛立ちは消えない。

滑り込む新幹線。

暗い顔をして乗り込んだ。

窓際の席を探した。

スリットの深いライトグレーのコートを　脱ぎ去り、フックに掛ける。

黒い胸元の開いたファー付きのセーター。

短いタイトのスカート。

お気に入りのピンヒールのストレッチブーツ。

苛立ちは消える事は無い。

煙草に火を点けた。

日曜日の夕刻　通路側のサラリーマン。

単身赴任先からの帰りだろう。

不躰な視線を送って来る。

そんな事に真美は、もう慣れっこだった。

乱暴に本を取り出す。ブックカバーのついていない村上龍「エクスタシー」

女王様とM男の話。

何度も読んでいる。

苛立ちを消すために、また読み始めた。

隣のリーマンの視線。

取り出した本と脚に釘付けだった。

無表情に気怠げに読み返す。

小田原を過ぎた頃、隣の男から紙切れを渡された。

品川で降りるんですね。良かったら……

苛立ちは本を読んでも消えない。

小声でリーマンに問う。

内容は解りきっていたが、真美はあえて聞いた。

何がお望みですか？

低音の落着いた悪魔の声で

微笑をうつすらと、浮かべながら。

もじもじしながら、また紙切れを渡される。

品川駅で、僕を思いのままにして欲しいのです。

耳元で囁く。

幾らで？

リーマンは指を3本立てた。

につこり頷いて承諾した。見つめ返すと、男は目が潤み始めていた。

股間に目をやると、恥ずかしそうに俯いた。スラックスは、いきり勃っていた。

恥ずかしそうな視線      以前の私の様だった。

苛立ちが募る。

憎悪はどす黒く渦まいている。

人間なんか所詮は、欲望の生き物だ。

品川駅でリーマンと降りる。

リーマンに案内されるまま、外れにある公衆トイレ。  
辺りを見渡しながら、女性トイレに入れる。

「で、先に払ってくれる？」

3万円を受け取る。

先払いして貰わなければ、後で痛い目を見るのは自分だ。  
渋谷で遊んでた頃がそうだった様に。

男を便座側に座らせる。

有無なんか言わせない。

金属製の汚物入れをドアの前に置く。  
ヤバイ状況になったら、派手な音を出す。  
有効な手段だろう。

真美は、ドア側に立った。      リーマンは便座に座る。

「で、何がしたいの？」

冷たい表情は変わらない。

苛立ちも消える事は無い。

欲情してる男は愚かにも見えた。

全てがオカノに見えた。

過去に、自分が弄ばれた男に見えた。

残虐な気持ちだけが、増幅されてゆく。

リーマンが、いきなり股間をいじり出した。

「はぁ？アンタ勝手に何やってんの？」

何をやっているのは、自分の方だ。

こんな所で一体、何をやってるといふのだ。  
時間が急に惜しくなった。

やるべき事は、まだ残っている。

「あの・・・してるとこ見てください」

欲望にまみれた男の馬鹿面。

弄ばれた全ての男と重なった。

忘れかけていた記憶が甦る。

12月 - - ボーナス時期

まだ財布から出せる。

幾らふっかけようか考える。

ギリギリの欲望 抑えられないのは知っている。

「幾らで？見て欲しいの？」

リーマンは指を3本立てた。

真美は、5本立てた。

驚愕に歪む顔。

当たり前だ、さっき3万も出している。

悪魔の様な微笑みは消える事は無い。

出すのか出さないのか、苛々した。

股間をブーツでこすってやる。

ブーツ越しでも解る固いモノ。

たったそれだけで、リーマンは、財布から5万を抜いて渡してきた。

合格。

堰を切った様に、男はスラックスと一緒にトランクスを  
恥ずかしげも無く脱ぎ去った。

便座を背もたれにしながら、左手で脚を触り右手は  
激しく上下に動いている。

脚を取り上げ、つま先を男の口に突っ込んだ。

最初は手前だけ、喜んで舐めしゃぶる男。

喜ぶ顔がムカついた。

喜ばせる為にやっている訳では無い。

何も考えず容赦なく、つま先を喉奥まで突っ込んでやった。

見開いた目から、涙が溢れ、苦しい呻き声が、トイレの中に響いた。

リーマンの、喉元が上下する。

ゲロを吐かれるのは、ごめんだった。

適度な所で、つま先を入れたり出したりした。

男の身体が硬直し始める。

「あああ・・・いっちゃう・・・」

リーマンは、ブーツを口先から離れた。

左手で真美の脚を抱きしめながら、右手を激しく上下させながら、ぶるぶると震えた。

ブーツに白濁した液体が飛び散った。

さっきまでオカノに汚されてきた。

ここでも、お気に入りのブーツを汚された。

苛立ちが怒りに変わる。

だらしなく呆けた顔の男。

白濁した液体を男の口元に持っていく。

男は顔を背けた。

お構いなしに、白濁した液体を顔になすりつけた。

苛立ちが収まらない。

ドアの前に置いておいた金属製の汚物入れを

力任せに蹴り飛ばした。

男はその音に怯えた表情を見せた。

もうここに居る意味など無い。

だらしない姿の男を置き去りにして 逃げる様にトイレから飛び出した。

時間が無い。

行かなくては、ならない場所がある。

小走りで改札に向かった。

人をよけながら改札を抜ける。

品川プリンス方面。

階段を一気に駆け下りる。

目の前のタクシーロータリー。

日曜日の21時過ぎ、まばらに客が、並んでいる。

クリスマスシーズン、駅に向かう人は、多かったが気にせずに、ブーツを脱ぎ去り、近場のゴミ箱に叩き付ける様に捨てた。

好奇の視線　　気にする必要もない。

靴を履かないままで、ようやくタクシーに乗り込む。

「山王まで行つて。」

車は走り出す。

ユウジに電話をかける。

コール3回、電話が繋がる。

「はい！こちら西武警察署です！！」

「すみません、ネット対策本部のユウジ部長を・・・」

「あ、ユウジさんなら亀有派出所の方に」

明るい声が携帯から響く。

「すつげーつまんないから。ていうか、山王の何処だっけ？」

「普通、今、部屋とか聞かね？」

「どうせ部屋なんですよ。早く言つてよ。」

「2国から、環七左行つてもらつて、みずほ銀行の辺。」

「さんきゅう、今から行くからさあ、で、悪いんだけど

なんかサンダルでも何でもいいから、靴持ってきてくんない？」

「はあ？」

「いいから持つてきて。近くなつたらまた電話するから。」



何か言いたげなユウジの言葉を遮って、一方的に電話を切った。  
運転手に道順を伝えて、断りを入れてから煙草に火を点けた。  
もう一度携帯を開く。

写メ 妻子の名前 車のナンバー 会社名 住所 郵便番号  
チエックを入れる。  
問題は無い。

後はユウジが引き受けてくれるかそれだけだ。  
環七に差し掛かる。

ユウジに電話をする。

3コールで繋がる。

「もしもし、子供電話相談室です」  
間抜けな声が聞こえる。

「つまらないし、どうでもいいから、もうすぐ着くから  
サンダルでも靴でも何か持って、先に待っててね。」

一方的に電話を切る。

車は緩やかに左に曲がり、遠目からでも解る背の高い ユウジ見えた。

銀行の前で、精液にまみれた1万円を、出して車を降りた。  
ユウジはサンダルをぶら下げて、ふて腐れた様な顔で 立って待っていた。

人通りもまばらな銀行の前。

訳が解らないという顔のユウジ。

「ってか、何でマミ裸足なん？」

「え？部屋で話すよ。」

サンダルを借りて歩きながら声が聞こえる。

「なんで、マミ、そう勝手な訳？オレんちに彼女来てたら どうする訳？」

「はあ？どうせ居ないじゃん。」

「んだよー。」

ふて腐れたまま歩き出す。

奥まったアパート。

静かに階段を登る。

広めの1ルーム。

男の部屋にしては、小綺麗だった。

「で、なに？コレが彼女なん？随分沢山の彼女に囲まれてるんだね。」

呆れた声が出る。

苛立ちが消えてゆく。

「ま、ハーレムってヤツだな。」

涼し気な顔で答える。

部屋中にガンプラが置いてあった。

「ビールでいい？」

冷蔵庫から缶ビールを渡される。

ブルトップを空け、適当な所に座って飲み始めた。

一息ついた所で、話し始める。

「あのね、お願いがあるんだけど。」

「どうせ、マミのお願いだから、ロクでも無いんだろ。」

お見通しだった。

「ただ、理由によっちゃ協力してやる。それだけだな。」

話そうか迷う。

唇を噛みしめながら考える。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5331b/>

---

ミルキー

2010年10月12日17時23分発行